



のび太くんの婚姻届 桜庭一樹

「婚姻届は紙で出したい！」

というコピーをなにかで見たとような記憶がある。何年前かのことで、いったいどこで目に触れたものかは忘れてしまっただが、「なるほどねえ」と感心したので覚えてる。

紙というものに対する信頼や、印刷される喜びは、世代によってちがって、やがては変わっていくものかもしれない。だがわたしはいまでも、自分がパソコンのワープロソフトを使って書いたばかりの原稿を、プリンターで印刷して、最初の読者として目を通す瞬間がとても好きだ。一日の中でいちばんほっとできる時間かもしれない。パソコンの画面上で眺めていたときにはなかったなにかが、紙の上にはあるという気がするし、よし、

明日もまたがんばるぞと思う。

そうは言っても、時代の変遷に連れて変わっていくものもあるだろう。年上の方とお話ししていて「昔の印刷方法だと、本からもっとインクの匂いがしたし、新聞を触ると手が真っ黒になった」と聞いたり、漫画編集者から「昔は、雑誌の校了明けに帰宅してお風呂に入ると、体のだよかについていたスクリーントーンの色ればしがお湯に浮いたものだ」と聞いたりする。それに、手書きで原稿を書きになる先生のお話を伺ったりすると、原稿をパソコンで書いて電子メールで送るといふ自分の生活は、すでに、子供のころにSF小説や漫画でさんさん親しんだ、未来の文化に近づいているのだなとも思う。

そういえば「ドラえもん」の主人公、野比のび太が大人になり、しずかちゃんと結婚しているはずのあの未来都市は21世紀初頭の設定らしいし、映画『2001年宇宙の旅』で描かれた「未来」も、10年前。フィリップ・K・ディックのSF小説『アンドロイドは電気羊の夢を見るか?』を原作とする映画『ブレードランナー』の舞台だって2019年で、もうすぐだ。



桜庭一樹(さくらば・かずき) ●島根県生まれ。1999年、『夜空に、満天の星』(『AD2015隔離都市 ロンリネス・ガーデン』)でファミ通エンタテインメント大賞に佳作入選。07年、『赤朽葉家の伝説』で日本推理作家協会賞、08年、『私の男』で直木賞を受賞。<GOSICK>シリーズ、『砂糖菓子の弾丸は撃ちぬけない』、『製鉄天使』『伏 麗作・里見八犬伝』など著書多数。最新刊は『ばらばら死体の夜』。

ジュンク堂書店新宿店にて。

先日、とある編集者と飲んでいて「遠い未来、人類が滅亡して廃墟になって、ずっと経ってから、どこからか宇宙船が飛来して、とうに失われた我々の文明を調査するだろう。そのときにこそ紙の文化は必要だ」と主張したことがあった。すべてがパソコン内のデータや電子書籍になっていた場合、電気がもうなければお手上げだ。だけど、紙なら……「古代文明だって、石に刻んだりパピルスに書いたから現代まで残っているわけだ。ねえ？」と聞いた編集者は「あはは」と笑っていた。

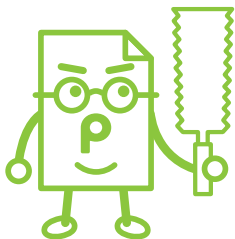
いつのまにか、のび太とともに成長して、未来世界にたどり着いて、パソコンやスマートフォンをそれなりに使いこなしながら暮らしているけれど、案外、変わらないものもあると思いたい。

わたしたちと同時代を生きる、大人になったのび太としずかちゃんの夫婦も、きっと婚姻届は紙で出したのだから。

ペーパー君のつ・ぶ・や・き 活動

伐ることので育つ森がある。

木を伐りすぎると森が減る。でも、何もしないと隙間なく木が生えてきて、日当たりが悪くなってしまうんです。森がすくすく育つためには、木を伐ること(間伐)も大切。さらに、そのとき伐った木(間伐材)は無駄にせず、紙づくりの原料にも使われているんだって。



紙のことをもっと伝えたい。詳しくは、「ペーパー君のつ・ぶ・や・き」WEBサイトをご覧ください。

<http://kamitsubu.com/>



◆次回は10月6日号です。

提供 ● 日本製紙連合会 <http://www.jpa.gr.jp>

感想募集

「紙と私」についてのご感想をお寄せくださった方の中から抽選で20名様に、この企画をまとめた小冊子『紙の春秋』と図書カード(3,000円分)をプレゼント!(詳細はP.000)